

古墳ってどうやってつくるの？

古墳時代は、現代のようにショベルカーやブルドーザーなどの機械がなく、鋤（すき）や鍬（くわ）を使って人の力で古墳をつくりました。日本最大の前方後円墳である仁徳天皇陵古墳をつくるのには、1日 2,000人の人々が従事し、15年8カ月かったのではないかと推計があります。

古墳づくり



① 遠くからよく見える場所を予定地とします。百舌鳥古墳群の場合は、大阪湾からよく見える台地の上が選ばれました。現地では木を伐採し、見通しをよくします。



② 設計図に基づいて地面に古墳の輪郭を描き、ポイントには杭を打ちます。



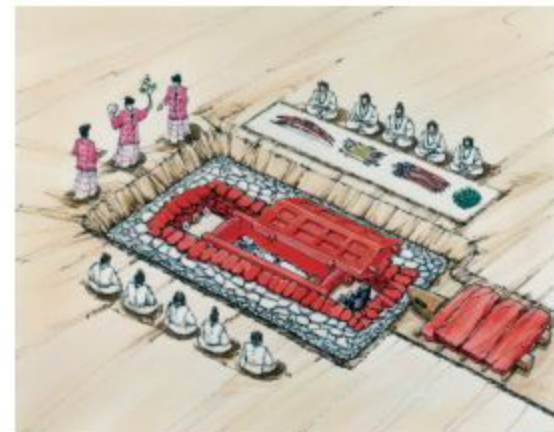
③ 地面を掘り下げて濠と墳丘の輪郭をつくります。掘り上げた土は墳丘に盛ります。足りない分は他の場所から運んできます。



④ 墳丘が整えられ、斜面には石が敷き詰められます。後円部墳頂に大きな穴が掘られ、石室がつけられます。



⑤ 石室の中に石棺が据えられ、墳丘や堤に埴輪が設置される。



⑥ 遺体が石棺におさめられ、甲冑や刃剣などの副葬品を供えながら盛大な儀式が行われます。



⑦ 石室に天井石が架けられた後、さらに土で埋め戻されて、その上に形象埴輪がたてられ古墳は完成します。

前方後円墳

現在の仁徳天皇陵古墳は小山のようにしか見えませんが、完成当時は、斜面に石が葺かれ、赤く塗られた埴輪が並べられていました。

後円部には、被葬者を埋葬する施設がつくられています。また、後円部の頂上や造り出し部分、堤の上には形象埴輪が並べられ、儀式が行われたと思われます。

前方後円墳の名称と名前

